

くろっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成十六年三月一日発行（毎月一回一日発行）
第十卷第十一号（通巻第一一九）

鈴



くろっけ

山口誓子先生追悼号

第119号

3. 2004

俳句雑誌

GLOCKE

白毫

品川鈴子

白毫^{びやくごう}はきらと快気の春灯

春陰の白毫病臥ながびきて

どか雪に欠航つづく機長の葬

吊花みな開き過ぎたり過暖房



悴みし指紋老とどめ操縦桿

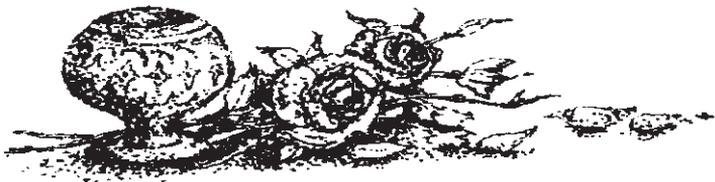
悴みて抹香こぼす留^とめ焼香

初霞へと涯しなく航き逝きぬ

成仏もせず飛びもせぬ凍てし蝶

駅ビル化八雲の泪時雨とも

やがて吾が屍横たふ昼替へ



玉 鈴

大阪 谷 泰子

火の神の二之鳥居まで紅葉狩
丁石の傍にによきによき冬蔵
三宝の鐘撞きてより時雨れたる
先行の帽子に留まる散紅葉
寂庵に手話盛り上がる紅葉晴

愛媛 筒井圭子朗

合併の村里廻る里神楽
大根を干す廃船の両舷に
被弾せし鴨が潜りて浮上せず
湯豆腐の角がお玉をはみ出せる
課外授業空教室に注連を縋ふ

兵庫 内藤三男

デイケنزを読み直して十二月
積上げて裾野から焼く粉の殻
二・三羽に続く二十羽鴨来たる
ほんのりと柚子の香たちし介護の湯
田仕舞の煙が囲む宮の森

吟

大阪 中島 霞

万両に古りて白緒の竹の下駄
扁額の宸筆うすれ冬紅葉
冬耕の二人相寄り相別れ
枯芝に金網影をあはく置き
大年の路地をふさぎてコンテナ車

大阪 中田征二

時雨るるも泰然自若越の漢
粕汁の香に火照る漢のゐて
衣食住三位一体春仕度
露凝りし朝戸出の道急ぎけり
ライバルへ怒髪天突く恋の猫

大阪 中田寿子

白息をゆつくり長く太極拳
聖堂のパイプオルガン寒ゆる
藁に置くキューピー人形聖夜劇
鳶着し父はおみやげいつもくれ
気短に餅裏返しうらがえし

愛媛 永野秀峰

島々へ連絡船が風邪運ぶ
遍路診る四国の医者 of 初仕事
値下がりを待ちて買ひたり大熊手
獅子頭脱げば出入りの植木屋よ
島の火事海水使えず燃えさかる

高知 西村梶子

進水へ少女の銀鉞風光る
ぞろぞろと山蟹現れし平家村
道塞ぐ祖谷の山蟹みな赤し
鮫鱈を吊す市場や多喜二の忌
涅槃西風戦死兄弟墓並び

兵庫 長谷川 鮎

美容室出て春風と齒科医まで
干し物に稚の衣もあり春の風
春の土靴底からの弾みあり
朝仕事種薯埋めて雨となり
開戦の号外もらい彼岸会へ

東京 長谷川登美

咲き替わるもの一つなき蕎麦の村
馬子唄で拳ふるわせ盆供養
あきらめし全館修理菊も見ず
忘るるなうずまく戦火月清し
初日の出悟ったりまた迷ったり

兵庫 花房 敏

百舌鳥猛る老婆地掘る犬叱る
羽織着て老いたる茶人むら仮粧
いと長き虫を排泄枯蠅螂
落葉径家無き翁と言交わす
大根を一本引きて農婦去る

東京 彦坂 範子

枯芒夢の余白をくづしゆく
日めくりの一枚のみぢ散る早さ
神の留守地震は地のそこ海のそこ
さむい顔水辺の風にさらしをり
霜おいて風に動かぬ草となる

薬草歳時記

(一一八)ワラビ(蕨)

菅原由紀

鎌倉の見える山なり蕨とる

小林 一茶

早春、山野に野草が芽ぶく。古来から歌に物語りにと読まれていた蕨。

万葉集の志貴皇子の歌に「石はしる垂水の上のさわらびの萌え出づる春になりけるかも」がある。心に残る歌の一つである。早春の訪れへの歓びがあふれている。

藤原為家も「山人の帰る小垣の路のべに折りやすげなる下蕨かな」と読んでいる。

源氏物語の椎本、早蕨の帖にも書かれている。

蕨は山菜の王者として蕨狩りや蕨摘みなどしながら、食用として昔から楽しまれていた。日本各地、東アジア、ヨーロッパ、北米の各地に分布。山野の陽のあたる場所に普通に生えている多年草のシダ植物。

根茎は太く、地中に横にのびる。葉はまばらで2〜3回羽状に分裂、長さは1〜1.5mになる。最終裂片は長だ円形。葉の裂片の裏面には孢子囊が連なっており、若芽の時は先

がこぶし状に曲がり褐色の綿毛が覆う。

薬用には地上部、根茎などを利用する。

地上部は春、夏に採取しそのまま日干し、根茎は秋に掘り上げ水洗いの後日干しする。

利尿、消炎、解熱的作用あり。また腫れものや創傷に用いる。利尿や浮腫には根茎や地上部を細かくきざみ煎じて服用する。

西洋民間では根を条虫や回虫駆除に利用していたとか。

ワラビ粉として古くからワラビの澱粉を利用。火にかけて透明になるまで練って、ワラビ餅などを作る。きな粉、あんこと共に食べるのも美味。

春の若芽は山菜として食用にする。

十分なアク抜きをして、葉柄のやわらかい部分をあえもの、おひたしにして食べると春の香りがいっぱい。

茎を塩漬けにして貯蔵し、保存食に。

最近先の部分に発癌性があると言われている。十分なアク抜きをしないで沢山食べるとビタミンH欠乏症になる。

山菜としてそのほろにがさと食感は早春を感じさせるもの。王朝の人々と同じように早春の蕨摘みは今も心をはずませる。

参考文献 「原色牧野和漢薬草大図鑑」 北隆館

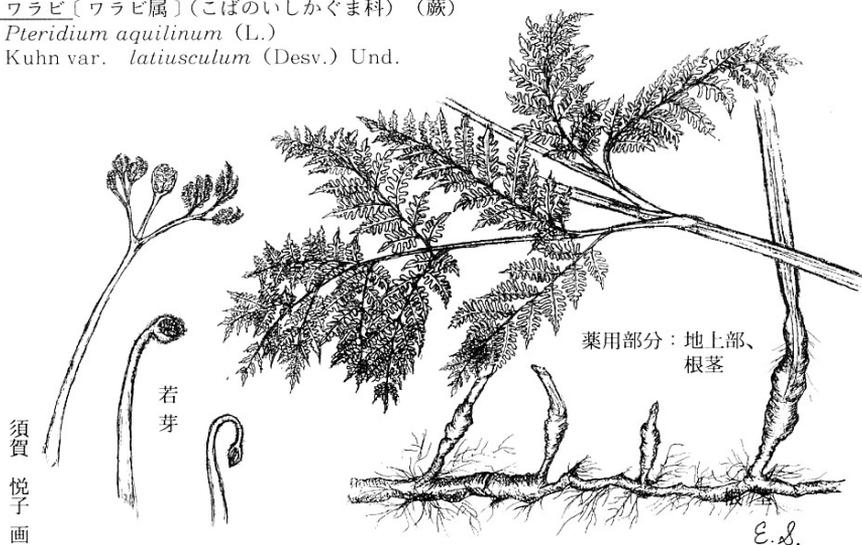
「山野草」 菱山忠三郎著 主婦の友社

著者略歴 神戸薬科大学卒

ワラビ〔ワラビ属〕(こばのいしかぐま科) (蕨)

Pteridium aquilinum (L.)

Kuhn var. *latiusculum* (Desv.) Und.



須賀悦子画

若芽

薬用部分：地上部、
根茎

E.S.

折りもてる蕨しをれて暮遅し
与謝 蕪村

道ばたに早蕨売るや御室道
高野 素十

早蕨は愛しむゆゑに手折らざる
富安 風生

天城嶺の雨氣に巻きあふ蕨かな
渡辺 水巴

一鷹を生む山風や蕨伸ぶ
飯田 蛇笏

丘にきて風のうごかす蕨摘む
秋元不死男

早蕨や裾田ひかりてよき日和
山口 誓子

雨にぬれ蕨のうぶ毛しろがねに
水原秋桜子

冗費とも当然とも初わらび買ふ
及川 貞

さわらびやこの児のジャンケンいつもゲー
北畠 明子

くろつけ

鈴の奏

品川鈴子選

あつらへし帯待ちおれば年詰まる 兵庫 木村 美猫

胃カメラを呑む覚悟なり大根汁

美しきことばを聞きに報恩講

大きくさめ茶飲み友達多き父

きたきつね流し目きらと闊歩せり 兵庫 藤井久仁子

霜の花敷く木道をへっぴり腰

水洩の落ちそつで落ちぬ立ち話

編みかけのセーター解き恋終わる

初結の白寿の母は紅さして 大阪 河村 泰子

ゆび編みのマフラー母にぎつくりと

ドナーカード一氣に書くよ龍の玉

草千里奴胤には揺れもなし

履きなれの靴で出掛けるもみじ狩 兵庫 伊藤 公女

絵筆にて野山色置く竜田姫

丸形のどんぐりまさぐり指体操

岩窪にそひ秋細る猿尾滝

停年のをとこばかりの紅葉狩 愛媛 三浦 澄江

眉描いて己励ます十二月

そぞろ寒堂に極楽地獄絵図

草じらみ罪ある如くつまみ除け

童唄みかんの皮を風呂に入れ 兵庫 上原口チエ

積雪が仕切りし棚田天に向き

牡丹雪谷瀬の吊橋見え隠れ

大島の海金剛に冬の濤

綾取りの糸を携へ母訪はむ 東京 後藤とみ子

蕎麦掻を吹いて無口になつてをり

負真綿小学生の五年まで

焼きたてのパンピチピチと冬暖か

落葉道風が掃除をして行けり 埼玉 岡田 章子

三倍を無駄に生きをり一葉忌

首掴み太さ確かめ大根抜く

童女還りの母が母呼ぶ鴉日和

紅葉山より対岸へ天の橋 兵庫 伊藤 光子

時雨来て何時みても佳し辰鼓櫓

秀 鈴 記

巻頭 三句 品川鈴子 評

四句 十五句 三橋早苗 //

* 選句は全て 品川鈴子

あつらへし帯待ちおれば年詰まる

木村 美猫

ゆび編みのマフラー母にざつくりと

河村 泰子

出来合いの柄や風合いでは飽き足りず、誂えた帯がどんな出来栄になるのかと期待を膨らませている内に、年が押し詰まる。初釜などの春着にも締めるつもりだろうか。衣裳に凝ってその仕上がりを待つ間は、ときめきにも似た悦楽。

「細雪」では婚約後の雪子は「今日もまた衣選ひに日は暮れぬ嫁ぎゆく身のそぞろ哀しく」と詠んだ。和装離れの近頃でも、倭文化の華として着道楽派も居る筈。

きたきつね流し目きらと闊歩せり

藤井久仁子

絵筆にて野山色置く童田姫

伊藤 公女

秋の女神が、絵筆で野山を赤や黄色に鮮やかに塗り上げていく姿。美しい風景ながらもダイナミック。春の佐保姫が対照的に思い起こされる。佐保姫なら、どんな色を置いていくだろう。秋色春色で一双の屏風絵になりそう。

北狐は北海道・南千島・サハリン等に棲み八十cm程の狐色の体で四肢の全面に斑紋がある。イヌ科の哺乳類。作者へ横目を光らせて何か云いた気な様子で、傍若無人にゆったりと歩く。きらと光る目付きは秋波めき、美女に変身して化かす本性も感じさせる。

停年のをとこばかりの紅葉狩

三浦 澄江

長い年月を勤め上げ、やっと手にした自由な日々。平の昼間は、職場にいるのが日常だった。それが今は紅葉

に來ている。女性グループが多い中、ぎこちなさそうに紅葉を楽しむ男性たちが目に浮かぶ。ごくろうさまでした。

童唄みかんの皮を風呂に入れ

上原口チエ

みかんの皮を湯船に入れると、市販の入浴剤にはない懐かしい本物の香りが立つ。いつの頃からだろう。擬い物が本物より幅を利かせたのは、童唄が歌われなくなった頃と重なるかもしれない。「みかんの花咲く丘」が湯船で口を衝いて出そう。

綾取りの糸を携へ母訪はむ

後藤とみ子

幼い頃母に教わった綾取り。糸をさばくと、琴、鼓、川などいろいろ形を変える。編み物をしている母に毛糸の端をもらって幾何学模様を楽しんだ。月日が経ち、人は老いていく。だが、日溜りの中、糸を取り合う母と子の温もりは変わらない。

首掴み太さ確かめ大根抜く

岡田 章子

畑には丸々と太った大根が我が物顔で並んでいる。大根

たちが、首根っこを掴まれて吟味されている。その後「参りました」と抜かれるところが見える。どつしりとした句を、ユーモラスな表現で味付けしている。きつとおいしい大根だったはず。

石路咲いて隠れ部屋あり武家屋敷

伊藤 光子

アメリカ映画「ラスト・サムライ」で武士道は、命がけの信念をもって誇り高く生きた男たちのほんものの美学、と謳われた。現在の日本に、武士道はあるだろうか。兵どもが夢の跡には、石路がひっそりながらも、凜と咲いている。

丹精の一鉢返せ菊攫ひ

尼寄太一郎

手塩にかけて育てた菊の一鉢は、わが子も同然。日々成長を楽しみにしていたはず。それを、こっそり持つていくとは人いと同罪である。「返せ」の叫びに共感する。罪人を「菊泥棒」とせず「菊攫ひ」と詠んだところに作者の感覚が光る。

(以下略)